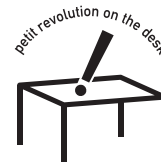


Vol.79

## 机の上の小さな変革



## 可能性の領域

こんにちは、菅俊一です。今回は、普段やらないような身体の動きをあえて行なってみることで、自分の身体がどのような構造に基づいて動いているのかを考えてみたいと思います。

まずはその場で立って、横歩きをしてみましょう。いかがでしょうか？ 明らかに歩きづらく、不自然な動きに感じられると思います。私たちの足の構造や関節の可動域は、前に向かって歩くことを前提に設計されていることがわかります。

続いて、利き手の人差し指と薬指の2本だけで、コインのような小さな物をつかんでみてください。この2本の指でつかもうとすると、想像以上につかみにくいのではないのでしょうか。私たちの手は、親指と人差し指は向かい合って挟むように動かすことができますが、親指以外の指は同じ方向に並んでいるため、物を挟んだり操作したりするには、構造的に強引な動かし方をする必要があります。

これら2つの例に共通しているのは、「やろうと思えばできるが、身体の構造上、非常にやりにくい」という点です。

私たちは普段、自分の身体を動かすとき、動作しやすい最適な方向や使い方を無意識のうちに選びとっています。この体の動かし方は、歩いたり、小さな物をつかむなどという目的を達成するためには合理的です。ただそ

の一方で、自分が「できる」と思っている範囲が、実はかなり限定的であることにも気づかされます。

## 「不可能」に「可能性」を見いだすには

ここで改めて「可能である」と「可能性がある」とこの違いについて考えてみましょう。私たちは「何かをやったことがある」という経験から「できる」と判断し、そこから「他にも似たことができるかもしれない」と可能性を推測しています。

しかし、経験していないことに対しては、たとえ身体的に可能であっても「できるかもしれない」と頭に思い浮かべることすら困難な場合があります。やったことがないというだけで、無意識に「不可能」に分類してしまっていることがあるのです。

だからこそ、今回のように「わざわざやりにくい動作」を試みることは、ぎこちない動きしかできない身体に向き合い、自分のなかにある「行動の前提」となっている部分を認識し、「できるかもしれない」と思える領域を拡大していくきっかけになるはずです。

ちょっとした違和感を抱えつつも強引に一步外へ踏み出してみることが、たとえその一步がぎこちなかったとしても、これまでの自分にはない新しい感覚や視点につながるのではないのでしょうか。



## PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、さまざまなメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』『ルール？本』など。